

長野県松本市

KAWANISHI - KAIDEN

川西開田遺跡 V

MIMAZAWAGAWA - SAGAN

三間沢川左岸遺跡 III

—— 緊急発掘調査報告書 ——

2001.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、川西開田遺跡第5次調査および、三間沢川左岸遺跡第3次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、三間沢川河川改修事業に伴う緊急発掘調査として実施した。発掘調査および報告書の作成は、長野県松本建設事務所より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は、II：赤羽裕幸、V-3：田多井用章、その他を竹内靖長が行なった。
- 4 本書作成の作業分担は、以下のとおりである。
遺物洗浄：百瀬二三子
遺物接合：五十嵐周子
遺物実測：田多井用章（土器）、洞沢文江（金属製品）
遺構図調整：石合英子
トレース：洞沢文江、松尾明恵
図版・一覧表作成：田多井用章、米久保治郎
写真撮影：米久保治郎（現場遺構写真）
総括・編集：竹内靖長
- 5 本書で用いた遺構の略称は以下のとおりである。
土坑：土、ピット：P
- 6 図中において用いた方位は、磁北を用いている。
- 7 遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は下記のとおりである。
表記法 土色（混入物・量） 混入物量 a 少量 b 中量 c 多量
〈土色〉
1 褐色 6 黄褐色 11 暗灰色 16 黄色 21 砂
2 暗褐色 7 茶褐色 12 黒灰色 17 暗黄褐色 22 砂礫
3 黒褐色 8 灰褐色 13 赤灰色 18 暗茶褐色 23 緑灰色
4 明褐色 9 橙褐色 14 黄灰色 19 黒色
5 赤褐色 10 灰色 15 青灰色 20 焼土
〈混入物〉
A 小礫 F 炭化物粒 K 茶褐色土粒 P 砂粒 U 灰色土粒
B 礫 G 炭化材 L 黄色土塊 Q 黒色土粒 V 灰色土塊
C 焼土粒 H 黄色土粒 M 黄褐色土塊 R 黒色土塊 W 赤褐色土粒
D 焼土塊 I 黄褐色土粒 N 橙褐色土塊 S 暗褐色土粒 X 赤褐色土塊
E 炭化物粒 J 橙褐色土粒 O 茶褐色土塊 T 暗褐色土塊 Y 鉄分
- 8 本調査に関する図面・出土遺物類は、松本市立考古博物館（長野県松本市大字中山3738-1 Tel0263-86-4710）で保管している。

目 次

例 言

目 次

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過 3
2. 調査体制 3

II 遺跡の歴史的環境 5

III 調査の概要 7

IV 川西開田遺跡第5次調査の成果

1. 検出遺構 9
2. 出土遺物 9
3. 小結 9

V 三間沢川左岸遺跡第3次調査の成果

1. 概要 10
2. 遺構 10
3. 遺物 10
4. まとめ 11

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

今回、長野県松本建設事務所によって、三間沢川河川改修工事が計画された。開発予定地は、川西開田遺跡に近接し、三間沢川左岸遺跡に該当していたため、まず試掘調査を実施して遺跡の範囲を確認した。試掘調査は、平成11年2月1日～2月10日に行ない、川西開田遺跡に4か所、三間沢左岸遺跡に7か所のトレンチを入れ、遺構・遺物を確認した。この結果を受けて、同建設事務所、長野県教育委員会、松本市教育委員会の三者で協議を行ない、緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになった。

発掘調査の実施にあたっては、同建設事務所より松本市が委託を受け、市教育委員会が発掘調査、整理及び発掘調査報告書の刊行等の業務を行なうこととし、委託契約が締結された。平成11年度は発掘調査及び整理作業を行ない、平成12年度には整理作業および本報告書の刊行を行なった。

2 調査体制

調査団長 竹淵公章（松本市教育長）

調査担当者

川西開田遺跡第5次調査

竹原 学（文化課主事）、小山高志（同事務員）、赤羽裕幸（同）、
櫻井 了（同嘱託）、米久保治郎（同）、加島泰祐（同）

三間沢川左岸遺跡第3次調査

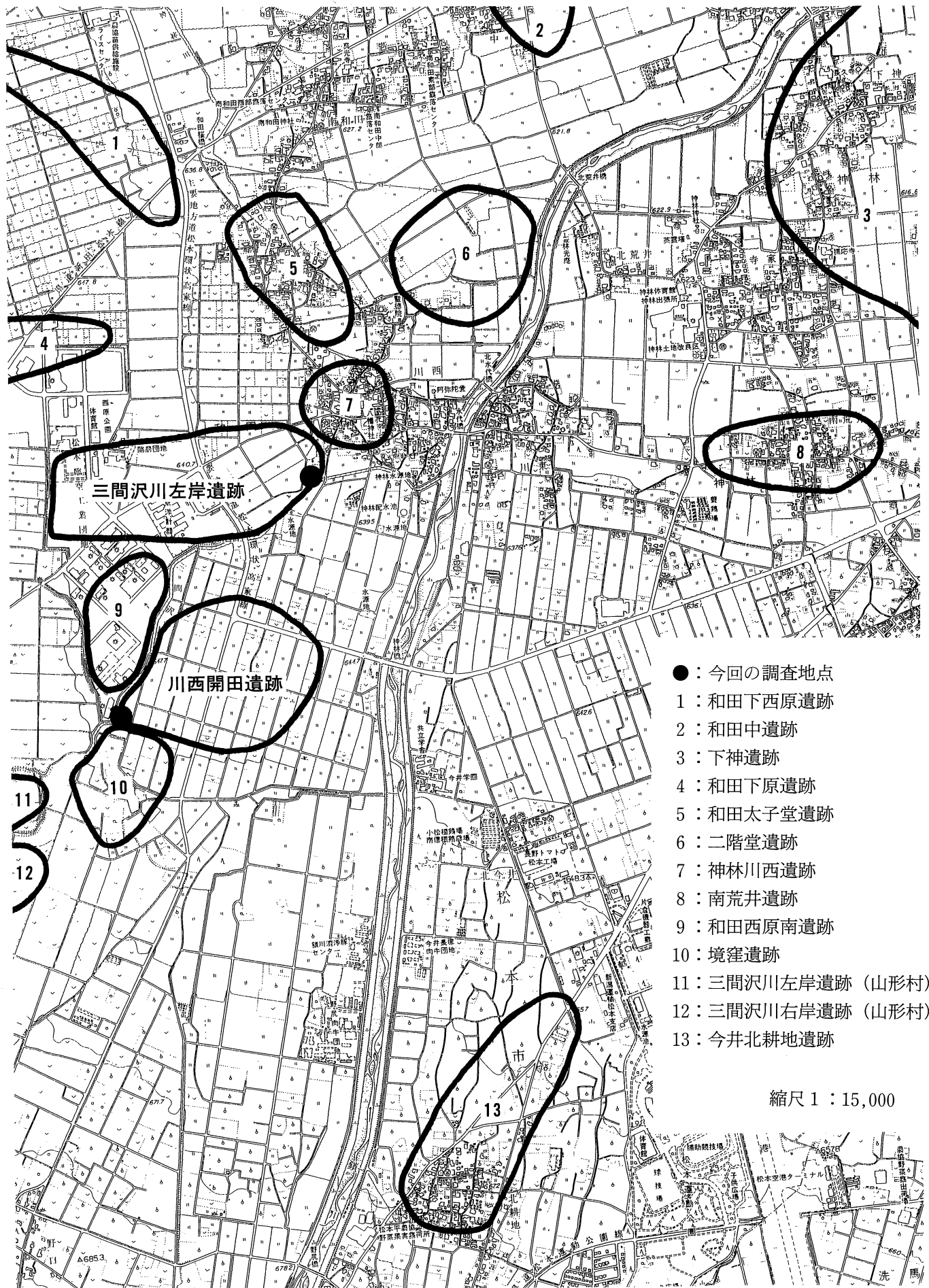
竹原 学、米久保治郎

調査員 今村 克

協力者 浅井信興、浅輪敬二、荒井留美子、飯島由次、五十嵐周子、石合英子、
石井脩二、石川光男、今井太成、白井秀明、内沢紀代子、大月八十喜、
上條信彦、上條道代、神田栄次、菊池直哉、小松正子、芝田とり子、
下条ちか子、鈴木幸子、鷲見昇司、高橋昭雄、高橋登喜雄、竹内直美、
竹平悦子、鶴川 登、寺嶋 実、中村安雄、中谷高志、林 和子、林 武佐、
洞沢文江、待井敏夫、松尾明恵、丸山喜和子、三枝昭廣、道浦久美子、
三代沢二三恵、村山牧枝、甕 國成、百瀬二三子、百瀬二三子、百瀬義友、
横山 清、吉野節子、米山禎興、渡辺順子

事務局 松本市教育委員会文化課

木下雅文（課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、
武井義正（主任）、久保田剛（同）、酒井まゆみ（嘱託、～平成12年6月）、
渡邊陽子（嘱託、平成12年7月～）



- : 今回の調査地点
- 1 : 和田下西原遺跡
- 2 : 和田中遺跡
- 3 : 下神遺跡
- 4 : 和田下原遺跡
- 5 : 和田太子堂遺跡
- 6 : 二階堂遺跡
- 7 : 神林川西遺跡
- 8 : 南荒井遺跡
- 9 : 和田西原南遺跡
- 10 : 境窪遺跡
- 11 : 三間沢川左岸遺跡 (山形村)
- 12 : 三間沢川右岸遺跡 (山形村)
- 13 : 今井北耕地遺跡

縮尺 1 : 15,000

第 1 図 調査地の位置と周辺遺跡

II 遺跡の歴史的環境

(1) 原始（旧石器・縄紋・弥生時代）

旧石器時代の遺跡として今井地区の上新田原遺跡から尖頭器、古池からナイフ形石器が採集されている。出土状況は不明である。また、和田地区の八幡原で尖頭器が発見されている。

西側の山形村・波田町にかかる一帯には三夜塚遺跡・下原遺跡を中心とする縄紋中期の遺跡が分布している。この遺跡には東西に長く窪地が残り、その南と北の両側に遺跡が密集している。この窪地は唐沢から続く旧唐沢川の跡と思われ、和田の遺跡のほとんどはこの旧河川と三間沢川左岸とのかわりによって生じている。三夜塚・下原遺跡より少し東に離れた和田西原南遺跡では中期中葉の住居址が1棟検出されている。

本遺跡の南方に位置するこぶし畑遺跡では、径20m近い集石の上に位置する複数の環状組石が発掘され、その縁辺から縄紋早期の押型紋土器片が出土している。縄紋中期の遺物も発見されているが、住居址は確認されていない。神林方面では奈良井川流域の南荒井遺跡、くまのかわ遺跡、牛の川遺跡などで中期中葉以降の遺物が出土しているが、いずれも単品で遺構は確認されていない。

本遺跡のわずか南に位置する境窪遺跡では縄紋後期の土器集中地点がいくつか見られている。また、川西開田遺跡のⅠ・Ⅱ次調査では土器・石器の他に土偶や土鈴などの土製品も出土している。

弥生時代の遺跡は従来ほとんど見られなかったが、平成7年から8年にかけて調査された境窪遺跡で中期の竪穴住居址が10軒、掘立柱建物址が9棟検出されている。土器・石器も豊富に出土している。他には、山形村の竹田原遺跡、松本市の和田太子堂遺跡、川西開田遺跡、三間沢川左岸遺跡で、遺物が数点出土している。

(2) 古代～中世

古墳時代の遺構は従来ほとんど見られなかったが、川西開田遺跡のⅠ・Ⅱ次調査では前期の土器が出土した。他には北側の三の宮・北栗・南栗遺跡などで住居址がいくつか検出された程度である。

本格的にこの地で開発の始まる奈良時代からはいくつか大規模な住居址群が見られる。その代表的なものが下神遺跡と三間沢川左岸遺跡である。

下神遺跡では奈良時代から平安時代にかけて竪穴住居址223軒、掘立柱建物址89棟を検出した。遺物でも土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・奈良三彩小壺の他に円面硯・漆紙文書・墨書土器などが出土している。墨書土器には「草茂」と書かれたものが17点あり、右大臣藤原冬緒が多武峰の妙楽寺に施入した信濃国筑摩郡蘇我郷の草茂庄を示すものであろうとされる。複数の有力な経営単位があったと見られている。

三間沢川左岸遺跡の発掘調査では9～10世紀のものと思われる270軒の住居址と13棟の掘立柱建物址が出土している。「王」の墨書などもあり、かなり有力な集落であったと思われる。また、「長良私印」の銘がある銅印、青銅器の銅鏡・八稜鏡・海獣葡萄鏡片等が出土している。緑釉陶器も多く出土する。川西開田遺跡のⅠ・Ⅱ次調査でも奈良時代から平安時代にかけて16軒の竪穴住居址が検出されており、互いに関連していると思われる。

中世の遺物としては和田地区太子堂中野尻の畑地で、国の重要文化財に指定されている鎌倉初期の孔雀文馨が発掘されている。また、衣外地区西側の供養塔の下で鎌倉期のものと思われる完形の四耳壺1点が発掘されている。

III 調査の概要

調査を実施した川西開田遺跡および三間沢川左岸遺跡は、松本市南西部の神林・和田地区に所在し、ともに鎖川と三間沢川の扇状地の緩斜面上に位置している。川西開田は、縄紋・弥生・平安・中世を主体とする遺跡で、過去4次にわたって調査が行なわれている。一方、三間沢川左岸遺跡は、過去3次にわたり調査が行なわれ、9世紀前半～10世紀後半にかけての270軒以上の竪穴住居址が発見されている。両遺跡ともに、松本市南西部の重要な遺跡として位置付けられる。

今回計画された三間沢川河川改修工事が両遺跡にかかるため、まず試掘調査を行なって遺跡の範囲を把握することにした。川西開田遺跡に4か所、三間沢左岸遺跡に7か所のトレンチを入れた結果、両遺跡ともに遺構・遺物を確認した。この結果を踏まえ、河川改修工事に伴う事業として本調査を実施した。

調査の方法は、遺構が掘り込まれる黄褐色土層面まで重機により表土を除去し、人力により遺構の確認・掘り下げを実施した。遺構などの測量記録は、磁北方向に沿って3mの方眼を設定し、各調査の実施期間、面積、検出遺構、出土遺物については、以下に列記する。

川西開田遺跡第5次調査

調査期間：平成11年8月20日～平成11年10月4日

調査面積：3616m²

検出遺構：土坑113基

ピット22基

出土遺物：土器（土師質皿・内耳鍋）、陶器（東海系捏鉢・山茶碗・卸皿・灰釉平碗など）、磁器（青磁・青白磁）

三間沢川左岸遺跡第3次調査

調査期間：平成11年10月21日～平成11年11月26日

調査面積：384m²

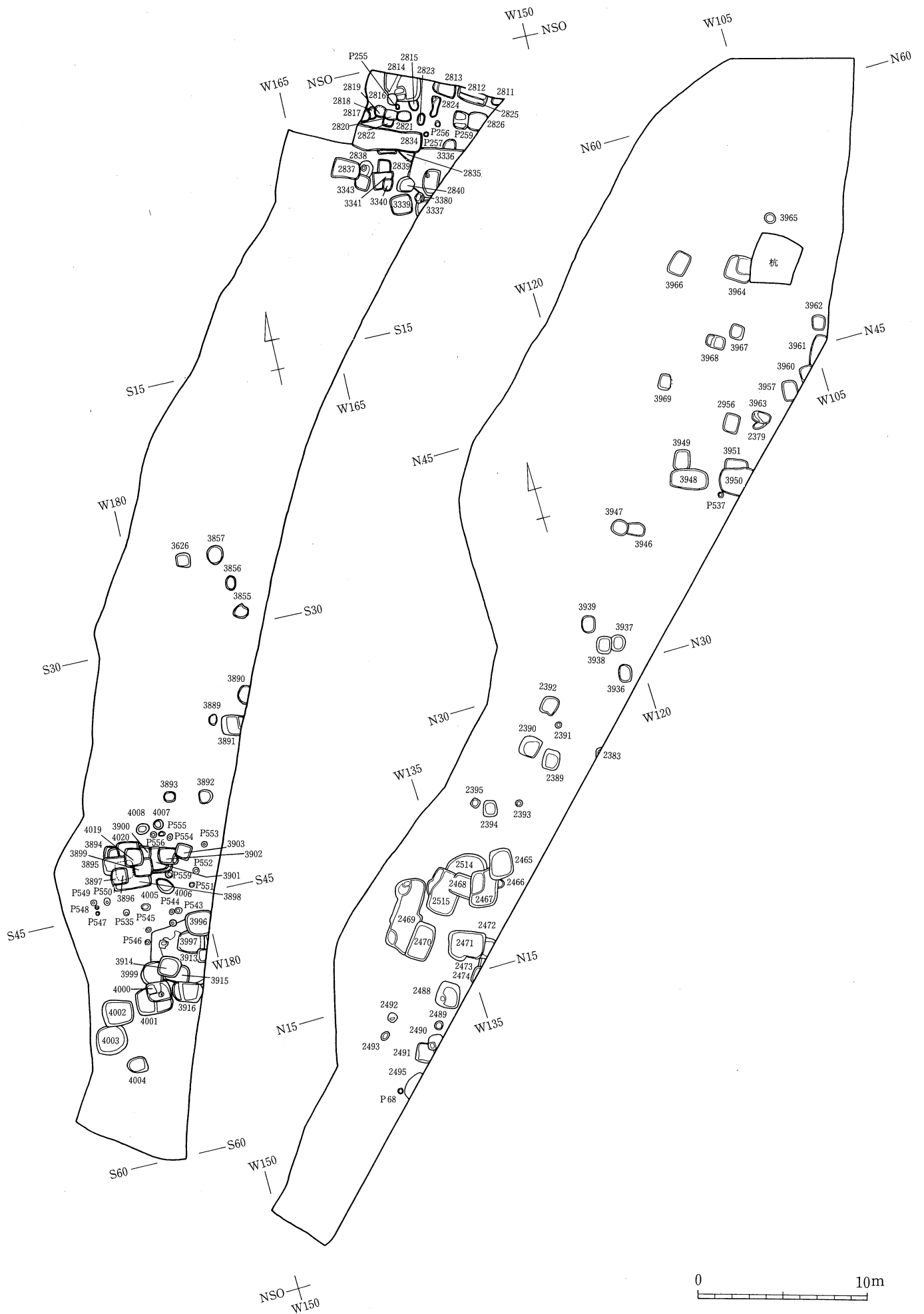
検出遺構：土坑48基（弥生中期44・不明4）

ピット35基（弥生中期26・不明9）

溝 5条

出土遺物：弥生時代 土器・石器

平安時代 土器（土師器・須恵器）



第3図 川西開田遺跡第4次調査 遺構配置図

IV 川西開田遺跡第5次調査の成果

1 検出遺構

今回の調査地では、土坑113基、ピット22基が発見された。これらは、すべて中世に帰属するものである。隣接する第4次調査B区で発見された土坑とあわせると、1759基にもものぼる。これらはすべて墓址で、13～15世紀代に大規模な墓域がこの地に形成されていたといえる。墓址の大半は土坑墓で、東縁部（4B区）に火葬墓が数基みられる。以下、遺構の種別ごとに、その概要を記述する。

(1) 土坑

土坑は、検出状況・出土遺物等からすべて中世の墓址と考えられる。これらのほとんどが、炭や焼土もみられず被熱痕も確認されないが、焼土や炭が出土し、被熱した状況が顕著にみられる火葬墓と被熱痕が全くみられない土坑墓とに分かれる。隣接した川西開田Ⅲ・Ⅳ次調査地でも同様の土坑が確認されており、総計1759基にのぼる大規模な墓域を形成していた。今回の調査区では、中世の土坑113基が発見された。平面形は、方形、長方形、円形、楕円形を呈するものがみられるが、方形もしくは長方形のものが72.6%を占める。

土坑の分布状況を見ると、主として3箇所集中する傾向にある。①調査区北端のS5・W160付近、②S43・W185の土3894・3898付近、③S50・W180の土4000付近で、いずれも土坑の切り合いが激しい。これは、限定された小区域のなかで継続して墓が作られていたためと考えられ、各集中場所が血縁関係を示すまとまりとも考えられよう。

(2) ピット

21基検出された。調査区南側と北側にそれぞれ集中してみられる。P542～P556は、土3894を中心とした土坑群の外側をコの字状に巡る。これは、墓域を区画する柱列や杭列、あるいは簡単な建物とも考えられる。P255～257も直線状に並んでおり、柵列状の遺構として考えられる。

2 出土遺物

今回の調査では、土坑内から中世の土器・陶磁器が出土している。

土器では内耳鍋、陶器は東海系施釉陶器・東海系無釉陶器など、磁器は輸入青磁・青白磁などがみられる。

3 小結

今回の調査では、比較的狭い範囲内ではあったが、13～15世紀に比定できる土坑113基が発見された。これらは墓址と考えられ、川西開田第3・4次調査で確認されているものとあわせれば、約2000基を数える墓地として考えられる。これだけの墓地が形成される背景となる中世集落の存在が今後の課題となる。調査地周辺では、和田の太子堂で孔雀紋馨が出土しており、寺院址の関連も予想される。

V 三間沢川左岸遺跡第3次調査の成果

1 概要

三間沢川左岸遺跡は、過去に2度の調査がおこなわれ、今回の調査は第3次調査となる。松本市臨空工業団地造成事業に際し、昭和62年に第1次調査、昭和63年に第2次調査が行なわれた。発見された遺構は、平安時代の竪穴住居址130軒、掘立柱建物址10棟、溝5本、土坑7基、ピット約100基の多数の遺構が確認され、出土遺物は約150点に及ぶ緑釉陶器、越州窯系青磁（1点）、銅製帯金具、佐波理鏡、銅印、八稜鏡、銭貨(富寿神宝)、石製帯飾など特殊品が多数出土している。これらの結果、人工的に掘られた用水路、計画的に配置された建物群など平安時代の村落の姿が浮き彫りとなった。

今回の調査は、三間沢川河川改修工事に伴い、平成11年10月21日～11月26日にかけて、384m²を調査した。発見された遺構は、土坑48基、ピット26基、溝5条で、出土遺物は、弥生土器(中期初頭)、平安時代土器・陶器、銅製帯金具、鉄釘などである。

調査の方法は、遺構検出面である黄褐色土層面まで重機で表土を除去した後、人力で遺構確認、掘り下げ作業をおこなった。遺構などの測量は、磁北方向に基本軸を定め、3m方眼を設定しておこなった。

2 遺構

(1) 土坑

今回の調査では、48基の土坑が発見された。いずれも調査区西半部に集中しており、溝3002よりも西側に分布する。平面形は、円形12基（25%）、楕円形が19基、（39.6%）、隅丸長方形6基（12.5%）、不整長方形1基（2.1%）、隅丸方形1基（2.1%）、不明9基（18.7%）で、円形もしくは楕円形のものが大半を占める。土坑の深さは全体的に浅く、出土遺物を伴うものは、17基（2・3・10・13・14・26・27・28・30・31・32・34・26・37・40・41・46：3000番代省略）あり、いずれも弥生中期前半に比定される土器が出土している。

(2) ピット

26基確認された。土坑と同様に、調査区西半分に集中する。遺物が出土したピットは、7・20・25・30で、いずれも弥生時代中期前半の土器片が出土している。

(3) 溝

5本検出された。いずれも調査区東半部に位置している。溝3001～3003・3005は、N-30°-Wの方角を指向する。出土遺物は少なく、所属時期は判然としない。

3 遺物

(1) 土器

今回の調査では、遺構及びグリッド包含層中から弥生土器・古墳時代の土器及び平安時代の土器が出土した。遺構に伴っているのは1点のみ（9・土3010）で、その他は包含層中及び検出面からの出土である。その多くは調査区南西から出土している。

弥生土器 29点を図示。いずれも弥生時代中期前半に位置するものと考えられる。出土量が少なく、

土器群の詳細を把握することはできなかった。器種は壺・甕及び「大地系」壺を確認することができた。壺(1・6・12・28・29)は、胴部上半に最大径を持ち、頸部の長い形態のものと思われる。文様は沈線文(1・3・5)のほか、刺突(2・4)が見られ、地文に縄文(いずれもLR縄文)が用いられているもの(2・5)もある。1は口縁部の内外面に沈線文が施文され、内面には平行沈線文と縦方向の沈線が確認できる。7の「大地系」壺は、明瞭な頸部を有し、口縁部の開く形態と思われ、その屈曲部から頸部にかけての部位と思われる。沈線間に刺突が充填される。甕(7~27)は外面の器面調整が条痕による。条痕には横条痕・縦条痕・斜条痕・羽状条痕の4者が見られる。羽状条痕は横方向のもののみが確認できた。9の口縁端部にはLR縄紋が施文される。文様としては、刺突(11・13)・沈線(15)がある。

古墳時代の土器 2点を図示。30は小型壺、32は高坏か壺の口縁部か。詳細が不明だが、古墳時代前期~中期に帰属するものであろうか。該期土器群は川西開田遺跡第1次調査でも出土している。近在に該期集落が存在していた可能性を示すもので、少量ながら重要な所見といえる。

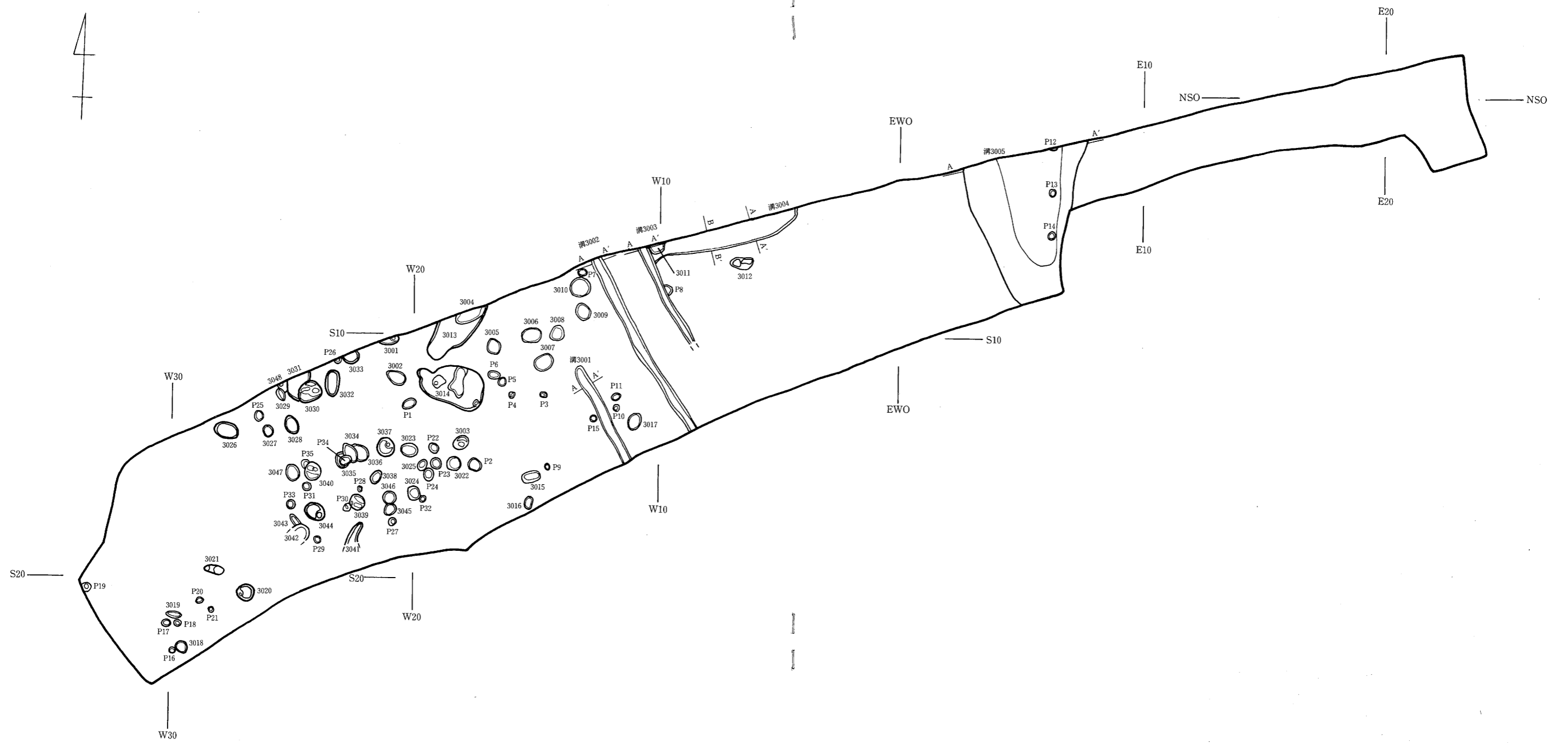
平安時代の土器 3点を図示。いずれも須恵器の坏で、34は底面が回転糸切り未調整である。このことから、8世紀後半~9世紀代のものと考えられようが、詳細は不明である。

(2) 金属器

2点出土し、ともに図示した。ともに包含層中から出土し、遺構には伴っていない。35は釘、36は帯金具の丸軛と思われる。三間沢川左岸遺跡では第1次及び2次調査で平安時代(9~10世紀)の住居跡から8点の帯金具が出土している。内訳は、巡方が7点(銅製5点・石製2点)、鉸具が1点(銅製)で、丸軛の出土は今回が初めてである。本例は明確な帰属時期が不明であるが、平安時代のものであろうか。

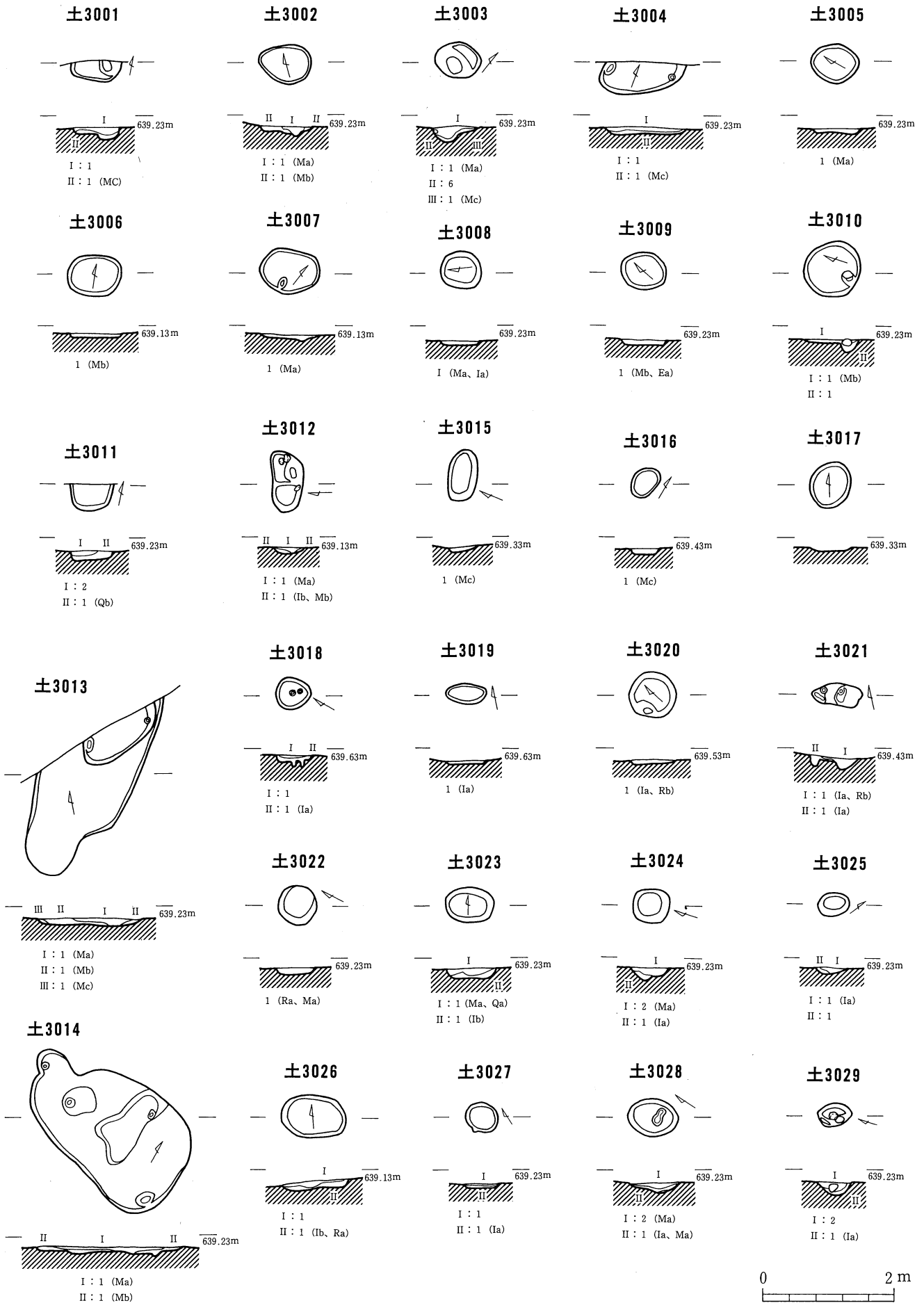
4 まとめ

今回の調査では、住居址は発見されず土坑・ピット・溝のみの発見となった。出土遺物は僅少なから弥生時代中期前半の土器がみられ、近隣の境窪遺跡とほぼ近似した時期の遺構と考えられる。集落の中心地からは外れているものの、境窪遺跡や三間沢川左岸遺跡の集落域の広がりを考える上で重要な資料を得ることとなった。

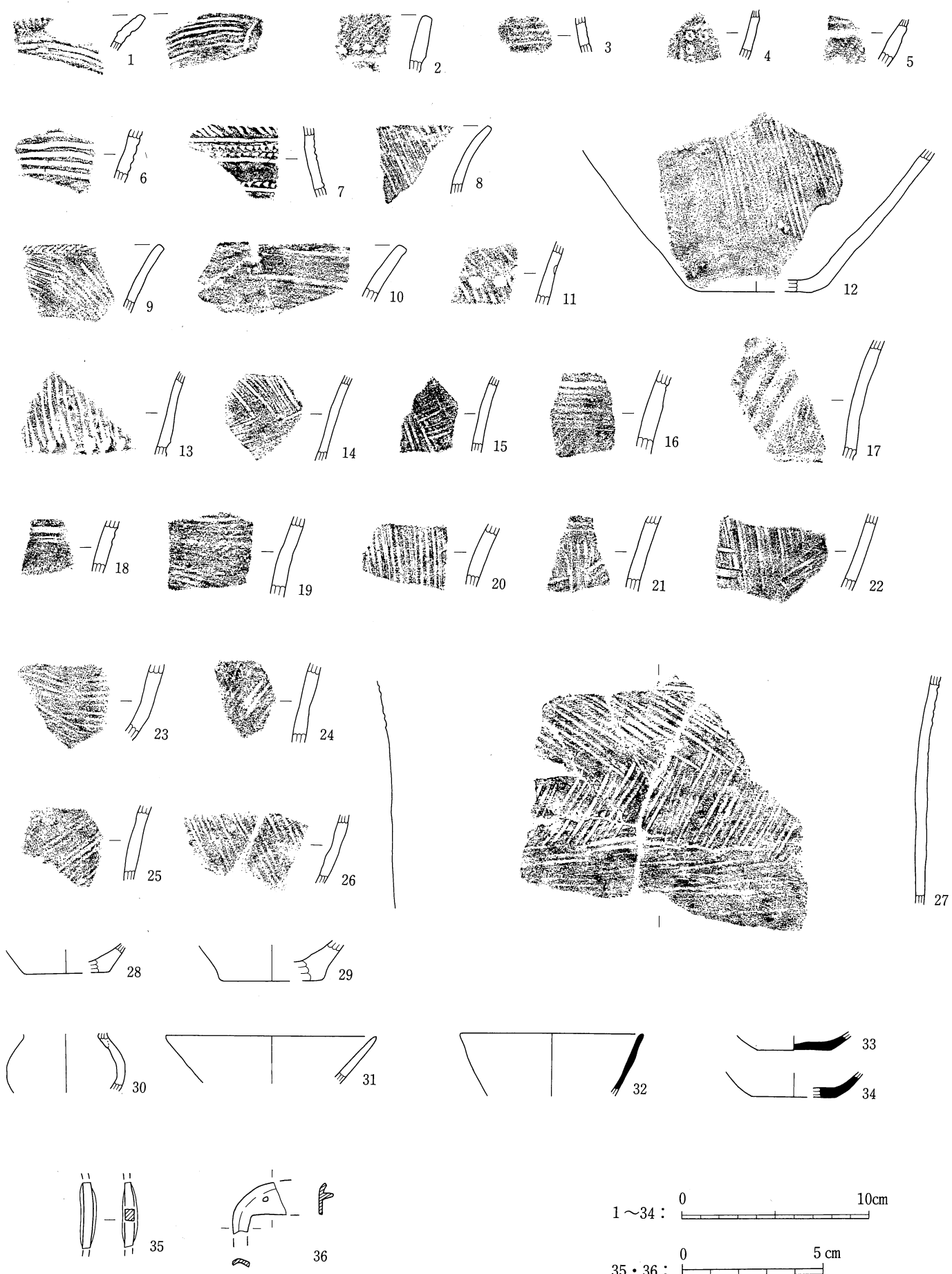


第4図 三間沢川左岸遺跡第3次調査 遺構配置図

土坑



第5図 三間沢川左岸遺跡(第3次) 遺構図(1)



第7図 三間沢川左岸遺跡(第3次) 出土遺物



調査区北部全景（南から）



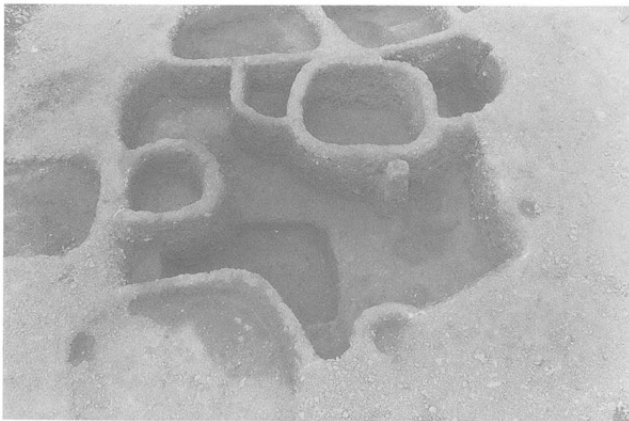
調査区北部全景（南西から）



作業風景



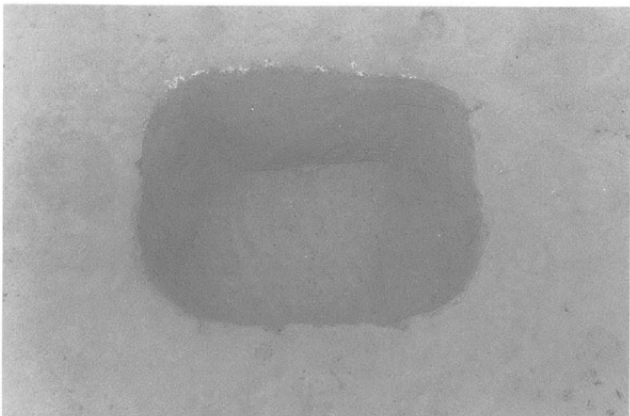
作業風景



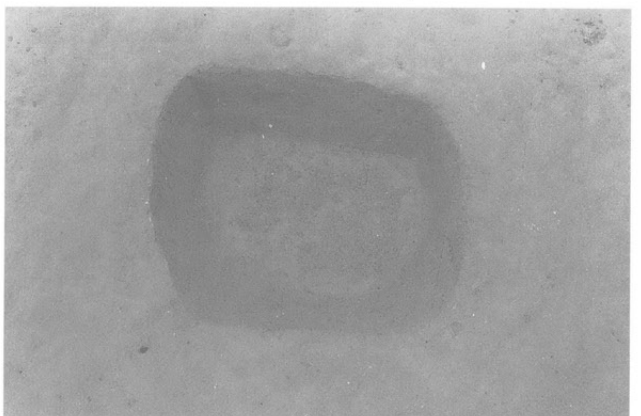
土3997完掘



土3997銅製品出土状況



土2389完掘



土2390完掘



土2465完掘



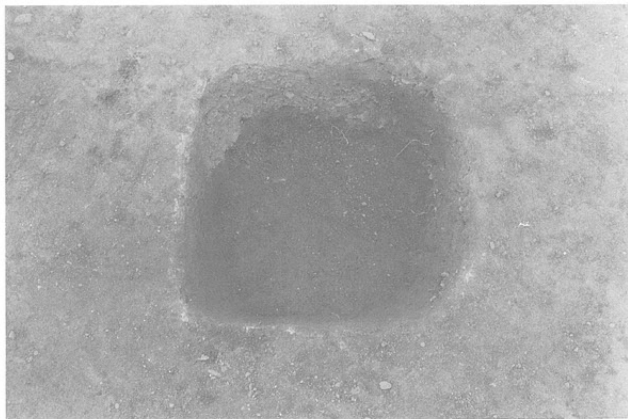
土2469完掘



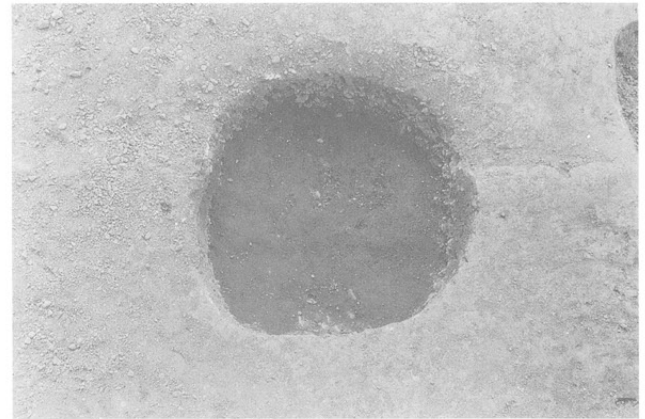
土2839完掘



土3336完掘



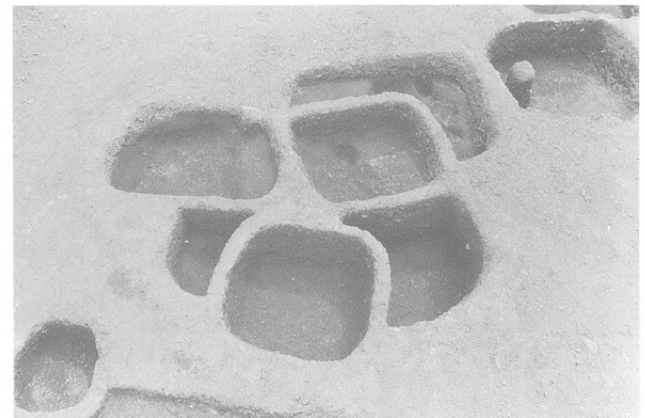
土3626完掘



土3890完掘



土3894完掘



土3914完掘



土3957完掘



土3960完掘



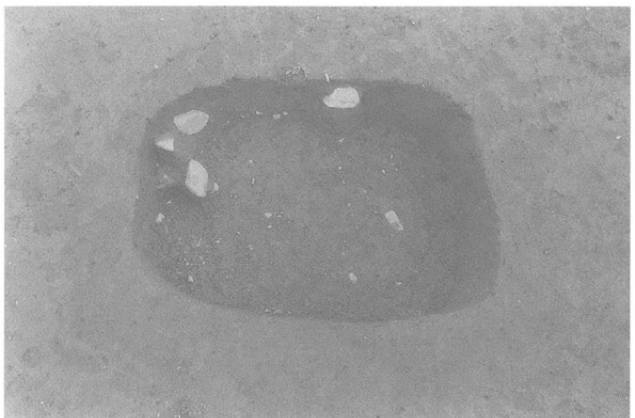
土3961完掘



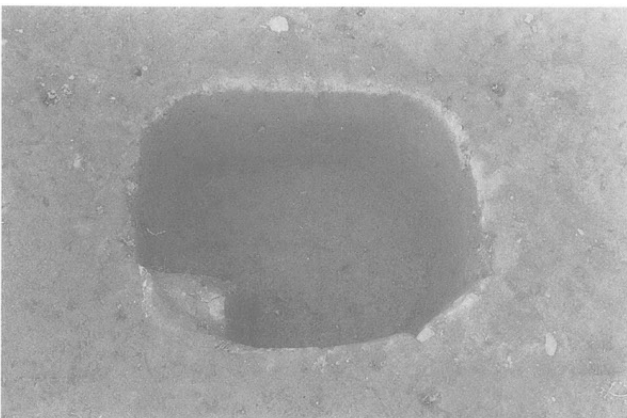
土3962完掘



土3964完掘



土3966完掘



土3967完掘



土4002完掘



調査区全景（西から）



調査区全景西半分（東から）



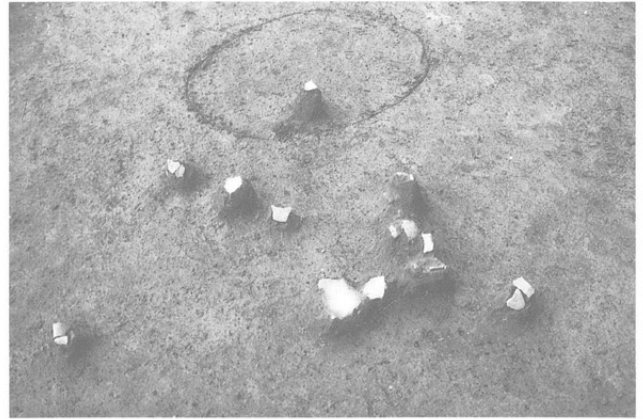
調査区全景東半分（西から）



調査区全景中央部（南から）



溝3001～溝3003（北から）



遺物出土状況（S12W24）



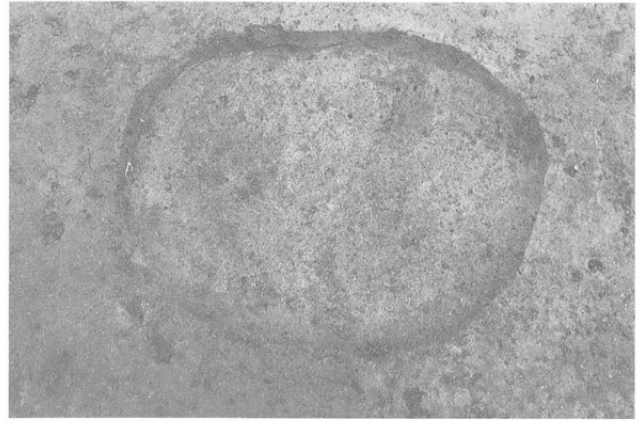
遺物出土状況（S15W21）



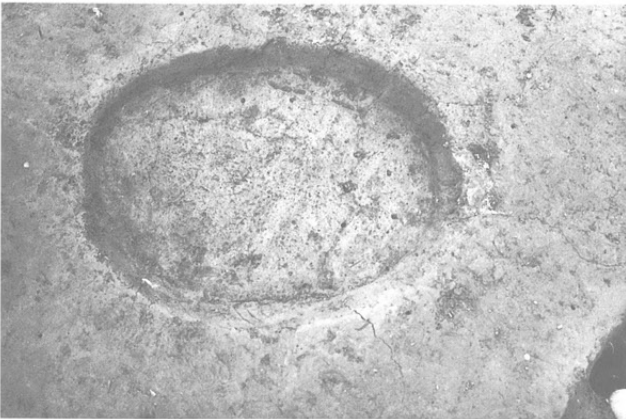
作業風景



土3003完掘



土3007完掘



土3009完掘



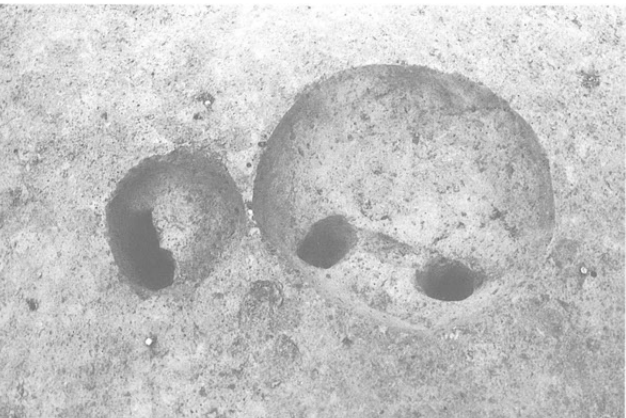
土3010完掘



土3012完掘



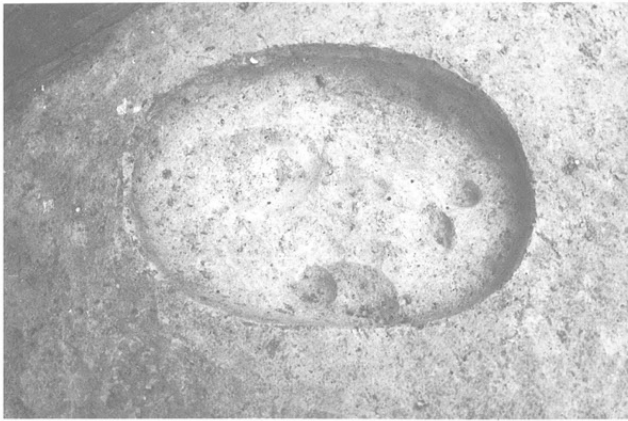
土3021完掘



土3024完掘



土3025完掘



土3026完掘



土3027完掘



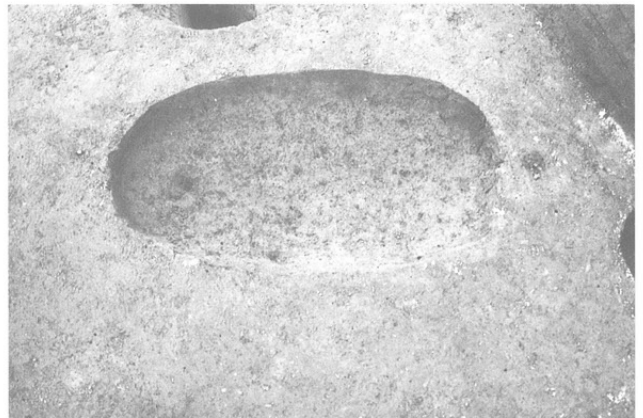
土3028完掘



土3029完掘



土3030完掘



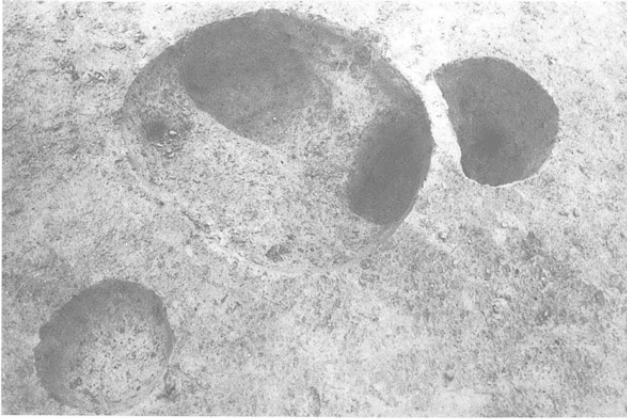
土3032完掘



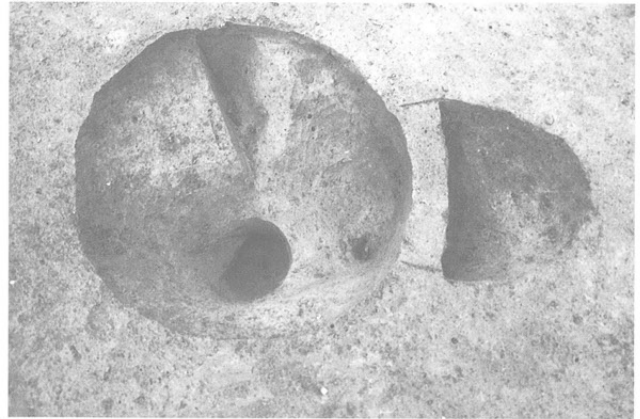
土3033完掘



土3034完掘



土3039完掘



土3040完掘



土3042完掘



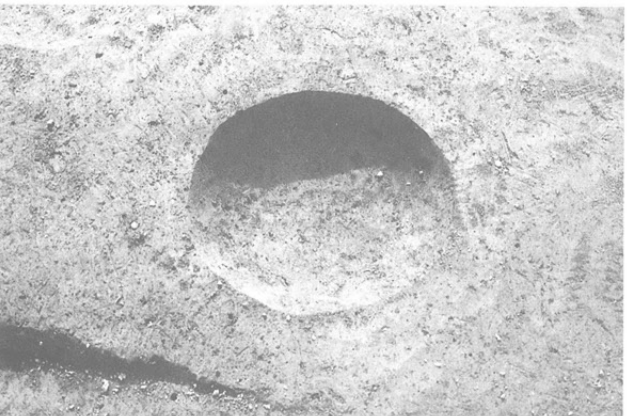
P1完掘



P2完掘



P21完掘



P22完掘



P31完掘

川西開田遺跡Ⅴ・三間沢川左岸遺跡Ⅲ緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし かわにしかいでんいせき5 みまざわがわさがんいせき3 きんきゅうはつくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 川西開田遺跡Ⅴ・三間沢川左岸遺跡Ⅲ 一緊急発掘調査報告書一							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.150							
編著者名	竹内靖長 田多井用章 赤羽裕幸 米久保治郎							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 (記録・資料保管：松本市立考古博物館・〒390-0823 松本市中山3738-1・TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2001(平成13)年3月23日 (平成12年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわにしかいでん 川西開田	ながのけんまつもとし 長野県松本市 かんぼやし 神林	20202	313	36度 10分 50秒	137度 54分 30秒	19990607～ 19991224	3616㎡	三間沢川河川改修事業
みまざわがわさがん 三間沢川左岸	ながのけんまつもとし 長野県松本市 わだ 和田	20202	288	36度 14分 30秒	137度 58分 54秒	19991021～ 19991126	384㎡	三間沢川河川改修事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
川西開田	集落址 墓址	弥生時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	土坑113基 (平安・鎌倉時代) ピット22基 (平安・鎌倉時代)		土器・陶磁器(土師質土器・内 耳土器・東海系捏鉢・山茶碗・ 卸皿・灰釉平碗・青磁・青白磁)		平安時代の集落址と鎌倉 ～室町時代の墓跡。後者 については、全くの新知 見であった。	
三間沢川左岸	集落址	弥生時代 平安時代	土坑48基 (弥生時代・平安時代) ピット35基 (弥生時代・平安時代) 溝5条		弥生時代(土器・石器) 平安時代(土器・帯金具)		平安時代の集落の南東 端部に相当する。帯金具 (丸軋)の出土は注目さ れる。	

松本市文化財調査報告 No.150

長野県松本市

川西開田遺跡Ⅴ

三間沢川左岸遺跡Ⅲ

一緊急発掘調査報告書一

発行日 平成13年3月23日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 アサカワ印刷株式会社